

ご近所のお医者さん

627

大阪大学医学部
眼科学准教授

松下賢治さん

—吹田市

眼科の「みどり」

「みどり」という言葉があります。眼科医から最も縁遠い言葉です。しかし、緑内障の診療をしていると、「みどり」という場面向き合う瞬間があります。

先日、お亡くなりになった患者さん

の奥様から、お手紙を頂戴しました。その

患者さんは、全身的な難病をお持ちだったのですが、それに加えて目の比較的難しい病気、小眼球と閉塞隅角緑内障を患っていました。まぶたが開け

とともに歩んだ10年

にくい病気もありましたので、眼圧が測定しにくい状態でした。難しい症例でしたので、治療として予防手術を選ぶ場合には、厳しめの説明になりました。なかなか決心できないうちに、10年が経過しました。東京オリンピック

ておられました。仲むつまじい夫婦とはこういう感じかなと思ったものです。

東京オリンピックをきっかけに手術を受けられて、術後とてもよく見えるようになりました。家族旅行にも出かけられたようです。まぶたもしっかりと開き、人になぶつからなくなりました。心も前向きになられて、ようやく、少し間隔を空けて診察することになりました。そ

ここに、突然の訃報――。

クが近づいた時に、少し気持ちが上向いてくれました。奥様から、若い時はスポーツ観戦が好きで、巨人戦、相撲、オリンピックを特に生まれ、そんな時は調子が良いとお聞きしました。

奥様からは、感謝の言葉とともに、寂しく、いとoshiiとお言葉。ご主人は目のコンプレックスに長い間悩んでいたらしく、治療が少しでも役に立っていたならと診察してきた10年を振り返ってみました。「みどり」

最近、すっかりまぶたが閉じて人になぶつかる生活らしく、なんとなく苦労が見て取れるご様子とのこと。それでも昔風の旦那様は少し強情、でも奥様はとても優しく、いつも寄り添っ

によく見えてくれて、こちらからも感謝です。合掌。

